

紹介

国語研究論集編集委員会編『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』

東京大学国語研究室
創設百周年記念

小林芳規

東京大学文学部の国語研究室が、一八九七年（明治三十年）に創設されて以来、一九九七年の平成九年を以て、百周年を迎えたという。

この百年の間に、「国語研究室」が、わが国の近代国語学の基礎を築きその発展充実に果たした役割の大なるに思いを致し、先ずは慶祝の意を表すと共に、斯の道に繋る一学徒として感謝の念を捧げた

い。

本論文集は、この百周年を記念して、「先人の労苦を偲ぶとともに、二十一世紀を迎えようとする新しい出発のために」（序文）企画・編輯されたもので、この国語研究室を運営された学博とここで学び巣立った学究を主とし、非常勤講師として講筵に立たれた積学を加えて、総勢七十名による七〇篇の論考を収めている。縦組論文

一〇七八頁、横組論文二六一頁、計一三四〇頁に及ぶ大冊である。巻首には、創設者の上田萬年博士の遺影を始め、「帝国大学文科大
学」に国語研究室を興すへき儀」なる議案の草稿（写し）と時枝誠記
博士の解説文の転載（『国語学』第三一輯、注は古田東朔氏）を掲げて
ある。

国語研究室の関係者に係る論文集は既に何冊か公刊されている
が、創設から半世紀を経て企画・編輯された『國語學論集』（橋本博
士還暦記念會編、昭和十九年刊）は、上田萬年博士の後を承けた橋本
進吉博士の華甲と退官を機に、門下生と学界の知友による五五篇を
収め、一〇五〇頁に及ぶ大冊であった。創設から百年の、その相半
ばにおける国語研究室をめぐる国語学の趨勢をうかがうことが出来
る。

そこで、その『國語學論集』と比較するという仕方、この度の
『国語研究論集』を紹介してみたい。先ずは、この百年の後半五十
年間における国語研究の動向の一面が知られるからである。

第一に、執筆者が、言うまでもなく、大きく入れ替っている。兩
論集に共に執筆しているのは金田一春彦博士・真下三郎教授のお二
方だけである。

第二に、従って、取上げられたテーマが、当然のことながら、異
なっている。この度の『国語研究論集』の各論考は、その取扱った
事象により、大凡、時代別に、奈良時代語から現代語へと配列して

あるようであるから、その線で眺めると、

1、現代語の論考の全論考に占める比率が、二割五分から三割五分
へと大きくなっている。
2、これには、執筆者に外国人研究者が新たに加わったことも係わ
っている。

3、現代日本語を扱った論考は、文法論が多く、外国語とその理論
の影響が見られる。

4、現代語の方言についての論考が二論文に半減した。

5、現代語の論考の占める比率が大きくなったのと相対的に、古代
語・中世語の論考の比率が五割五分から三割へと小さくなった。

6、特に、いわゆる中世語とされる、院政・鎌倉時代語について
は、この時代の用語に言及したのも若干はあるが、真正面から
取上げた論考は皆無となった。

7、又、室町時代語の論考も七編から二編に減った。

8、反面、幕末から明治時代にかけての近代語、特に現代語の直接
源流に当る言語についての論考が新たに加わり、十余編が教えら
れる。

の諸点が、五十年前の『國語學論集』に対する主な異なりとして挙
げられる。

第三に、対象とする日本語へのアプローチに相違が認められるも
のが生じた。あの『國語學論集』では、総じて、過去の文献を対象

としてはドウアツタカ、方言を始め現代語を対象としてもドウアルカという、実態の解明に重点が置かれていた。この『国語研究論集』においても、奈良時代語を扱った論考の一部、平安時代語・室町時代語及び現代語方言を対象とする論考は同様のアプローチを採っている。特に江戸時代と明治時代の言語を対象とした十数篇はいずれもこの仕方である。これは、この二つの時代語が、文字表記・音韻・語法・語彙、資料発掘、外国資料との比較等において、今後その実態の解明される余地の少なくないことを語るものである。

これに対して、現代語の特に文法を扱った十数編は、広範な現代語の事象の中から或る面を切取って、条件を設けたり新視点を導入したりして細密に分類して行くという、いわばドウトラエルカの傾向が強く現れている。内省が可能である反面、文献の言語に対しては、無限とも見える現代語を対象とする場合、分類が益々精緻になつて行くのは当然の成行きとも思われるが、こう細分類された一語、一語を積み重ねて現代日本語の文法体系をドウ記述しそれにドウ位置づけようとするのか、限られた紙数の論考からは見えて来ないのは止むを得ないところか。ドウ解釈スルカは、平安時代の和文や字音資料の解釈や漢語解義の諸論考にも見られ新しい傾向であるが、奈良時代語の論考の中には、関連する幾つかの事象を通してドウ合理的二説明スルカが又新しい仕方として見られる。奈良時代語

については、現存する文献が限られていることもあって、ドウアツタカの実態が相当程度に解明されたという認識に立つのである。うが、人麿歌集を古体歌・新体歌・作歌に分析して、その表記と用法の綿密な考察により助動詞ケリの意味を再検討するというような追及がまだまだ望まれる。

五十年前の『国語學論集』は、『国語研究室』が文献国語史を課題に実証的研究を骨子として歩んで来たことを反映するものである。その中には、例えば、金田一春彦博士のアクセント史、東條操教授の方言学、春日政治博士の訓点語研究の論考のように、その後、国語学の新分野を開拓することになった好論が既に現れていた。

翻って、この百年の前半五十年間にも目を配り、国語研究に新分野を開拓した諸業績を、その契機という点から型として把えて見ると、三つの型が得られる。第一の型は他分野の学問の影響であり、第二の型は偶然に良いものを発見すること、但しタナボタではなく、偶然是用意の出来ているものしか助けない、を前提とするものであり、第三の型は研究対象を分析的に把えてそれぞれを独立した分野として見据えることである。国語研究室を創設された上田萬年博士が西欧の言語学により国語史の新分野を拓かれたのは第一の型であり、東條操教授が方言研究史の近代を拓かれたのもこれに入る。上田博士の後を承けた橋本進吉博士がいわゆる上代特殊仮名遣

を再発見し上代語の研究に新分野を拓かれたのは第二の型である。時枝誠記博士の後を承けた松村明教授が、国語史を時代別に記述する趣向の中で、江戸時代語からは幕末の言語を、近代語からは明治時代の言語を取出して近代語研究に力を尽されたのも、築島裕博士が平安時代語の中から漢文訓読語を折出して和文語と区別しその体系を記述されたのも第三の型である。

このような伝統の厚みと重みの上に、この百周年記念の『国語研

究論集』が加えられた。この中には、次の百年間に向けて、新しい分野を開拓するであろう芽も含まれているやに見えるが、それが真の新大陸として豊饒になる為に、個々の学究の精進に期待する所大である。

(平成十年二月刊 A5判一、三六四頁 三五、〇〇〇円 汲古書院)

— 広島大学名誉教授 —